

令和4年度 学校だより 7月号 6月30日発行

横浜市中区山元町3-152  
電話 641-4857



# やまもと

横浜市立山元小学校  
校長 前島 潤

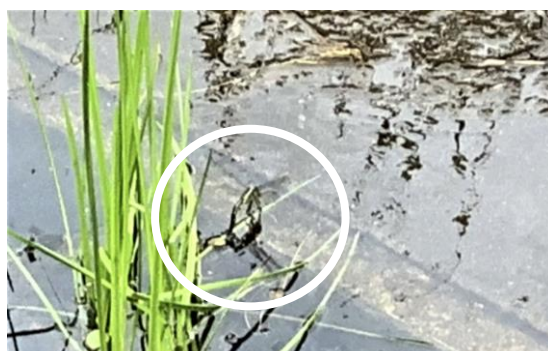
## 自分を大切にできる子 共に生きる子 山元の子

### トンボと関わる子どもの姿から

校長 前島 潤

校長室で飼育していたヤゴが羽化し、トンボになりました。マルタンヤンマです。羽化したオスは成熟すると、美しい青色の眼と体になるので「トンボの宝石」と言われています。ヤゴは校内の池で捕まえました。本校では、今のところ、このマルタンヤンマを含め、10種のトンボが繁殖しています。市内のトンボの生息地と比較してみましたら、この種数は多いことが分かりました。10種のトンボが繁殖できるぐらい、校内の環境が多様であると言えるのかもしれませんが。

校内でトンボが繁殖している水辺の一つに「トンボ池」があります。この池は、現3年生が、昨年度、生活科の学習の中でつくり出した池です。子どもたちは、プールから救出したヤゴをトンボになるまで飼育した体験から、「トンボが山元小学校に戻って来て卵を産んでほしい。」という願いをもちました。その願いが、トンボ池をつくる活動へつながりました。トンボ池は、裏庭にあります。子どもたちの願いは叶い、今、その池にはトンボがやって来て産卵しています。トンボと子どもたちの素敵な物語です。



トンボ池で産卵するトンボ（4年児童撮影）

今年度も、2年生が、プールのヤゴを救出する活動を行いました。一人一匹のヤゴを大切に飼育しています。主にギンヤンマのヤゴです。ヤゴの飼育は初体験の子がほとんどで、そのために必要な情報を図書資料などから主体的に集めていました。ミミズを食べると分かったら、農園へ向かってミミズ捕りに勤しみ、動くものなら食べると分かったら、朝、ダンゴムシを手を持って登校し、

「ヤゴにあげるんだ。」

と教えてくれます。

6月20日に第1号のギンヤンマが羽化すると、教室中の大ニュース。

「〇〇さんのヤゴがトンボになったんだよ。」

「こんなに大きなトンボだよ。」

手で大きさを示し、我が事のように喜んで伝えてくれる子がいました。友達のヤゴの抜け殻や羽化したトンボの姿を見て、次は自分のヤゴの番だと、大きな期待を抱いているようでした。

「〇〇さんのヤゴは緑色になったけど、もうすぐトンボになるのかな。」

自分のヤゴと友達のヤゴの様子を比較しながら観察し、その違いに気付いている子もいました。教室は、伝えたい思いと言葉にあふれていました。

多くの先生方はそうだと思いますが、私も担任を務めていた頃は、授業中、どの子にも自分の考えを発信してほしいと願っていました。どうしてもっと積極的に考えを伝えてくれないのかと一方的に思うこともありました。しかし、伝えたい思いと伝える言葉が生まれなくては主体的な発信につながりません。そのためには豊かな体験が必要だと気付くようになりました。今回のヤゴの飼育も、動画や写真など、資料的なものを見ただけでは、子どもたちにあそこまでの思いや言葉はあふれなかったでしょう。本物のヤゴに出会い、飼育する活動が、五感で感じる豊かな体験であったからこそだと思います。

情報があふれ、バーチャルな体験も容易にできる時代です。その反面、本物との出会いから、実感を伴う理解や感動を得る機会は減っているのかもしれない。

新学習指導要領が目指している「主体的・対話的で深い学び」のためには、本物の「ひと・もの・こと」との出会いから始まる豊かな体験を大切にしたい授業づくりが欠かせないものだと、ヤゴを飼育する子どもたちの姿から学びました。



トンボ池